

最終回:二つの羅針盤が導く未来

そして、物語は冒頭のシーンへと戻る。

霞が関、法曹会館のホール。万雷の拍手の中、結城翔太は受賞講演を締めくくろうとしていた。ステージの袖には、誇らしげな表情のフレッシュデライト社の担当者たち。そして客席の後方には、腕を組んで微笑む西園寺玲子の姿が見えた。

「...私は長い間、迷っていました。顧客の要望という『木』を見るべきか、ビジネス全体という『森』を見るべきか。現場に寄り添うべきか、経営戦略に従うべきか」翔太は会場を見渡した。最前列には、妻の麻美と、少し背が伸びた娘の菜々美が座っている。菜々美が小さく手を振った。翔太は優しく微笑み返すと、言葉を続けた。

「しかし、答えはその『間』にありました。ビジネスアナリシス(BA)という、現場の痛みに共感し、詳細を解き明かす顕微鏡。そして、ビジネスアーキテクチャ(BAc)という、未来の全体像を描き、構造を設計する望遠鏡。この二つの視点を行き来することでのみ、私たちは『絵に描いた餅』ではない、生きた変革を起こすことができるのです」

彼は胸ポケットから、愛用している万年筆を取り出した。それは彼にとっての象徴的な羅針盤だ。「二つの羅針盤は、時に違う方向を指すように見えるかもしれませんが。現場の情理と、経営の論理は対立します。しかし、その対立の中にこそ、イノベーションの種があります。私たちビジネスアナリストの役割は、その二つの針が交わる一点、すなわち『納得解』を見つけ出し、人々を未来へ導くことです」

「かつて私は、羅針盤を失い、霧の中を彷徨っていました。しかし今は分かります。羅針盤は誰かに与えられるものではありません。私たち自身が、誰かのための羅針盤になるのです」

「ご清聴、ありがとうございました」

翔太が深く一礼すると、会場はこの日一番の拍手に包まれた。壇上を降りた翔太を、麻美と菜々美が迎える。「パパ、カッコよかった!」「お疲れ様。...今日は、美味しいものでもお祝いしましょうか」「ああ、そうしよう」

翔太はふと振り返り、玲子のいた場所を探したが、彼女の姿はもうなかった。ただ、携帯端末に短いメッセージが届いていた。『合格よ。でも、次の航海はもっと荒れるわよ』

翔太は苦笑しながら空を仰いだ。オフィスの窓から見えていたあの灰色の梅雨空は、今、抜けるような青空に変わっていた。終わりなき変革の旅は続く。だが、もう恐れることはない。彼の胸には確かな二つの羅針盤があり、隣には大切な家族がいるのだから。

(完)

あとがき

これにて『BA奮闘記 ～二つの羅針盤が導く未来～』、全12回の完結となります。主人公の成長、メンターとの出会い、家族との葛藤、そしてビジネス変革の成功まで、一貫したテーマで描き切ることができました。

この物語はフィクションですが、ビジネスアナリシスやアーキテクチャの概念（部分最適と全体最適、ケイパビリティ、バリューストリームなど）を学ぶためのケーススタディとしても機能する内容になったかと思います。